

# 一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより

第76回

## 贈正四位蒲生君平碑

二荒山神社境内に建立された顕彰碑



二荒山神社境内の西側、西参道に二つの大きな石碑が建っている。ひとつは「日露戦役戦捷記念碑」、もうひとつは「贈正四位蒲生君平碑」である。顕彰碑の説明板によれば、篆額は大勲位有栖川職位親王の御洗筆、撰文は文学博士重野安繹、書は元老院審議官巖谷修とあり、建立は一八八九(明治二十二年)六月十二日とあった。

蒲生君平は、高山彦九郎、林子平とともに「寛政の三奇人」と並び称された偉人。一七六八(明和五年)、宇都宮新石町(現小幡一丁目)で油商を営む福田家

に生まれ、のちに祖先が武將蒲生氏郷であったことを知り、崇敬の念を込めて自ら蒲生姓を名乗るようになった。

君平の名前を不動のものにしたのが、歴代天皇陵九十二陵を実地調査し考証した「山陵志」である。今も使われる「前方後円墳」という名称は、このとき考案されたもので、その後の山陵研究に大きな影響を与えた。一八一三(文化十一年)、四十六歳で没。江戸谷中坂下の臨江寺に葬られた。

君平の没後五十年の歳月を経た一八六二(文久二年)、宇都宮藩による山陵修補が開始された。これは坂下門外事件の際、藩士から関係者を出し、幕府の嫌疑を受けていたことから、藩士

縣六石の進言により、「幕府を助け朝廷に勤王を尽くすには、宇都宮の生んだ蒲生君平の志を継いで、わが藩にちよて山陵修補の事業を起こすことが最上の策」(「偉人蒲生君平の生涯」岩崎良能)と考えたからである。

幕府から山陵修補を許された戸田忠至は、山陵奉行に任じられ、一八六五



南新町に建立された勅諭碑

(慶応元)四月、四年の歳月と二十二万七千五百六十八両を費やし、この事業を成し遂げた。この功績により宇都宮藩は、幕府の処罰を免れ、明治維新を迎えることになる。

一八六九(明治二年)、明治天皇は君平の功績を讃え、勅命により「勅諭忠節蒲生君平里」と刻した「勅諭碑」を宇都宮の入口にあたる南新町(現花房三丁目)に建立させた。また、天皇は一八八二(明治十四)年、君平に正四位を追贈。この贈位に対して、有志による顕彰碑建立の気運が湧き起こり、発起人には、久我建通、東久世通禎、戸田忠友、樺山資雄が名を連ね、全国から賛意を募った。募金運動は功を奏し、二荒山神社境内に、仙台伊那石による碑高三六メートル、幅二四メートル余の大碑が建立された。